

職人の視点と「道具」から照射する：日本美術史に 埋もれてしまった「芸術の戦争責任」

知足，美加子
九州大学大学院芸術工学院：教授

<https://hdl.handle.net/2324/7324492>

出版情報：週刊読書人，2024-06．読書人
バージョン：
権利関係：



土田 昇著

瀏瀏と研ぐ

職人と芸術家

口絵に著者・土田昇が研いだ鑿の画像がある。それは、寒気がするほど清らかな月光が広がる風景のようである。私は時間と所作が刻まれたその存在感から目が離せなくなった。

土田は、木工手道具全般の目立て、研ぎ、すばみ等を行う技術者である。本書は著者の鍛冶場風景からはじまり、「木工手道具によってつながる職人と芸術家たち」が職人の視点から語られていく。次第に物語は、彫刻家・高村光太郎が依頼し道具鍛冶の名工・千代鶴是秀が制作したとされる一本の彫刻刀へとフォーカスしていく。この彫刻刀の素材は玉鋼ではな

いの手と意識が、鉄・火・石と接するときのイメージは、この「感触」という言葉以外では表現しえないだろう。

土田は、鈴木実や岩野亮介の彫刻を「美しく実用性が低いものだけが引き起こす不思議」と表現する。芸術の面白さのひとつに、技術的な上手下



職人の視点と「道具」から照射する

日本美術史に埋もれてしまった「芸術の戦争責任」

知足 美加子



四六判・304頁・4620円
みすず書房
978-4-622-09699-3
TEL. 03-3814-0131

手と、作品の良し悪しが必要しも運動しないという点がある。上手すぎたピカソは、子供のように描くために一生をかけた

人にとって、上手さは善であり使命だ。乗り越えるべきは先人の技術である。この二つのベクトルが接する点を、土田は

恵子との暮らしの中で《手》《鉋》などの素晴らしい彫刻作品を生み出す。精神を病む恵子との現実とは詩集『智恵子抄』の美しさに昇華され、彼の徹底した美の希求は戦争賛美詩に連続してしまう。光太郎は戦争加担への悔恨から、戦後七年間、岩手県奥の山奥に

高村光太郎と違い、千代鶴是秀は「刀は打たぬ」「職人」だったと推察される。父、智恵子、戦争さえも形而上的な美の中に固定してしまった高村光太郎。憶測だが、静寂と平安の中で道具と向きあう間は、彼自身のまま

「道具」からみる平等性は、高村光太郎のある一面を鏡のように映し出す。著者の目は、光太郎の道具に関する造詣の深さや、制作時間の二・三割を研ぎに費やしたことを見抜く。そして父・光雲からの「技術相承の面影」と、染み入るような「孤独」を感得する。光太郎は、どのように抵抗

寛が溶け合う不思議には、創造の感動と共に「その感触は自分だけのものなんだから」という孤独がある。本書は彫刻家であり詩人の高村光太郎に多くの紙面が割かれる。彼は仏師の技術を近代彫刻に繋げた高村光雲を父にもち、高度な彫刻技術を有した。留学後は、妻・智

★つちだ・のぼるは土田刃物店三代目店主。著書に『時間と刃物職人』など。一九六二年生。

大学院教授・芸術学・彫刻 手道具との対話『職人の近代 道具鍛冶千代鶴是秀の変容』『刃物たる